

■ Topics | トピックス

製薬協特別番組 テレビ熊本

**「知りなっせ!聞きなっせ!～たいが気になるおくすり事情～」
公開収録を開催**

2017年12月2日、テレビ熊本のスタジオ(熊本市北区)において、製薬協特別番組「知りなっせ!聞きなっせ!～たいが気になるおくすり事情～」の公開収録が行われました。当日は60名を超える観覧者が参加し、糖尿病を例に新薬の価値を伝えるとともに、震災時にも機能した熊本県の透析医療や、くすりの製造現場、そして治験の重要性等、出演者と一緒に楽しく学ぶ機会となりました。なお、収録された番組は2018年1月21日にテレビ熊本で放送され、製薬協のウェブサイトからもご覧いただけます。



会場(テレビ熊本)

知りなっせ!聞きなっせ!～たいが気になるおくすり事情～

製薬協広報委員会コミュニケーション推進部会は、研究開発志向型の製薬企業および新薬が果たす社会的役割の重要性について、広く一般の人に理解してもらうことを目的とし、地方テレビ局とタイアップして公開収録とテレビ放送を実施しています。2017年度の公開収録は、2017年12月2日にテレビ熊本のスタジオで行われました。当日は、熊本大学大学院生命科学研究部代謝内科学教授の荒木栄一先生、熊本県薬剤師会常務理事の森山憲治先生に加え、地元熊本県で人気のタレント太田弘樹さん、熊本県出身の元プロレスラーでタレントのマツハ文朱さんをゲストに迎え、製薬協からは広報委員会の加藤拓磨委員長が参加しました。

番組の収録冒頭で、加藤委員長より、「医療用医薬品」と「一般用医薬品」の違いや、「医療用医薬品」には「新薬」と「ジェネリック医薬品」の2つに分類されることを説明しました。



出演者のみなさん

新薬と健康「透析患者全国2位」

熊本県は、人口あたりの透析患者数が全国第2位であることが紹介され、荒木先生より腎臓の機能と透析についての説明がありました。さらに透析導入の原因として一番多いのが糖尿病であり、糖尿病の治療を適切に行うことで、透析に至る可能性を減らすことができるという話がありました。

糖尿病 疾患と新薬について

熊本大学医学部附属病院のVTRを交え、糖尿病や糖尿病の合併症についての詳しい紹介がありました。

糖尿病は血液中の糖(血糖値)が慢性的に高くなる病気であること、血糖値はインスリンにより制御されること、そしてインスリンがうまく働かないと血糖値が高くなること、さらに肥満になるとインスリンの効きが悪くなり血糖値が上がりやすくなること等の説明がありました。

熊本県は全国に比較して血糖値の高い人やメタボリックシンドロームの該当者が多く、これらは糖尿病予備軍であると考えられ、実際に40～74歳の熊本県民の4人に1人が糖尿病予備軍もしくは有病者という調査結果があることが示されました。また、糖尿病は、自覚症状がほとんどないことが特徴のため、まずは自分の血糖値を知ることが糖尿病の診断の第一歩であることが紹介されました。さらに、空腹時の血糖値が110mg/dLを超える場合は、糖尿病の可能性があるため病院での詳しい検査が必要であり、126mg/dLを超えている場合は、糖尿病で合併症を発症している可能性が高いため、合併症の検査も含めて早めの受診が必要との説明がありました。

また、VTRで紹介された糖尿病治療中の60代男性の患者さんは、「糖尿病は自分に関係のない病気」と思っていたため、知らず知らずのうちに糖尿病が進行していました。足が黒ずんでいたため受診をしたときには、糖尿病の合併症の中の一つである神経障害の疑いがあると診断されました。その後の入院治療時に、さまざまな科が連携を取った治療を受けたことで、糖尿病が改善し、足の切断も免れたことが紹介されました。

糖尿病治療の基本は、生活習慣を是正するための食事療法と運動療法であり、それでも十分に血糖値の管理ができないときにすりが使用されます。現在は、新薬の登場により治療の選択肢が増え、それぞれの患者さんに合った糖尿病治療が行われるようになってきています。今回、血糖値を下げる薬を使いながら、運動療法と食事の改善で体重を落とすという治療を行っていましたが、その効果が不十分であった患者さんに対し、新薬が投与されたことで、血糖値が良好に管理でき、透析導入に至らなかった例も紹介されました。

VTR後、荒木先生から、「糖尿病は予防が大切で、まずは生活習慣の是正、そして血糖値を知ることから始めてほしい。糖尿病であった場合は、きちんと治療すれば合併症にはならないので、治療が大切」という話がありました。

また、森山先生からは、「糖尿病となった場合は、くすりを理解し正しく使用することが重要である」とのコメントがありました。

熊本地震でも機能した熊本県の透析医療

2016年に熊本で発生した大地震の際の透析患者さんに対する医療関係者の対応について、VTRで紹介されました。

熊本中央病院腎臓課診療部長であり熊本県透析施設協議会会長の有菌健二先生より、熊本地震の際、治療に必要な水や電気等も途絶え、さらに災害対策のために組織されていた熊本県の透析協議会のネットワークは、事務局が被災したため活用することができない状況であったとの説明がありました。しかし、厚生労働省、熊本県、福岡県を中心とする周囲の透析医会のサポート体制がすぐにとれたこと、日頃から災害対策マニュアルを作成し、ライフライン途絶時の対応方法の検討や薬剤のストック等を行っていたことにより、3日以上透析ができない透析難民を生み出すことなく、透析が実施できたことが紹介されました。

また、熊本の医薬品卸会社である富田薬品の社員のみなさんより、倉庫や物流センターが大きな被害を受けているという大変な状況下であっても「くすりを必要としている人へ確実に届ける」という強い使命感のもと、医薬品の供給を止めることなく患者さんへ届けたという話がありました。

くすりづくりの現場

医師や薬剤師が安心してくすりを処方・提供するためにも、そして患者さんに安心して服用してもらうためにも、くすりの品質管理は製薬会社にとって大変重要な使命の一つです。今回は、熊本県にある三和化学研究所の熊本工場を取材し、いかに厳重な品質管理と衛生管理のもとでくすりが製造されているかについてVTRで紹介がありました。

また、この熊本工場も熊本地震により大きな被害を受けましたが、東日本大震災時の福島県の工場での被災経験を活かし、日頃より被害を最小限にするための訓練を行っていたことにより、被災後、約2ヵ月半で全面復旧したことも紹介されました。

新薬開発に不可欠な治験について

国立病院機構熊本医療センターの協力のもと、新薬の開発に必要不可欠な「治験」についての内容を紹介するVTRが上映されました。同センターの中川義浩先生からは治験とはどのようなものであるか、同・日高道弘先生からは、実際に治験の後にくすりになった事例の紹介がありました。また、中川先生から、「くすりの候補の正確なデータを集めるには、たくさんの人に協力してもらうことが必要であり、一人ひとりの協力、思いが『くすり』の誕生へとつながることから、協力というかたちで、患者さんには治験参加をお願いしている」という話がありました。

製薬産業を広く理解してもらうための「製薬協の広報活動」

加藤委員長より、製薬協の広報委員会は、一般の人々の製薬産業理解のために、製薬協のウェブサイトによる情報発信、今回のようなテレビシンポジウムの開催、新聞や雑誌、あるいは刊行物等を通じての情報提供活動を積極的に行っているという説明がありました。



収録の様子

最後に

最後に、マツハさんから「私たちの毎日の生活というのは病気とのかかわり合いが切っても切り離せないけど、それともう1つ、おくすりとかかわり合い方がこんなに大きく深いものだとは。これから、ますますおくすりの将来を期待して待っています」、太田さんから「健康なのが一番ですけど、病気になったときは病院に行って、くすりを出してもらって、そしてちゃんと服用する、これが大事ななと思いました」との感想がありました。

司会者からの「この番組でみなさんの健康維持、そして医療にかかわる方への理解が深まり、ご自身の健康のために役立つ行動を始めてみようというきっかけになったら嬉しいなと思います」との挨拶で、「知りなっせ!聞きなっせ!～たいが気になるおくすり事情～」の公開収録は大きな拍手の中、終了しました。

(広報委員会 コミュニケーション推進部会 長谷川 千明)